

暮らしの手ざわりが伝えてきた無形の価値



自然が生きている町

西村 雑賀社長とは、町産の「米」を通じて、町民の健康や自然環境の改善、米の消費活動の活性化に協働して取り組むため、9月に連携協定を締結させていただきました。社長は久山町にどのような印象をお持ちですか。

雑賀 川の水がきれい。前に来たとき、川を見に行っただけです。昔から川を見るのが好きでね。何を見るって、護岸を見るんです。「ここは、自然が生きている」と感じました。護岸が固められてない、草も石も自然のままで、微生物の宝庫。自然の浄化力がちゃんと働いているんです。素晴らしいところです。

西村 この町の自然は、残すことを選んできた町民の皆さんのおかげで今に続いています。高度成長期に開発を抑制することは、簡単な判断ではなかったと思いますが、今では、大きな財産です。

雑賀 町民もどんどん変わるし、意識もどんどん変わるわけでしょう。けれども、やっぱりこれが大事やねってずっと残っている。それは、すごいことです。

自然が持つ力を生かす

西村 久山町のまちづくりを振り返ると、自然は、コミュニティ形成の重要な基盤にもなっていました。先祖の土地ということもありますが、地域が支え合って山を守る、田畑を守るってことが生活の一部として根付いています。この町に人のつながりが残るのは、自然があつたからだと思っています。

雑賀 私は、人類は、文明を手に入れた代わりに大事なものを失っていると思うんです。例えば、自然界の動物は、注射を打たんでも普通に生きてるわけで、人間とは、すごい隔たりがある。自然の摂理っていうのかね、それをもっと大事にせないかんのじゃないかと思うんですよ。

西村 そうですね。どこに手を加えないか、その試行錯誤と選択は、結果として町の価値になる場面は多いと感じています。久山町は今、自然環境が好きだから、教育環境が良いからということで、移住ニーズが高いです。今度は、その環境を維持、発展させていくために私たちが成すべきことを考えていく番です。

雑賀 技術開発を続けてきて思うのは、自然が本来持っている力を削らないこと。



さい か けい じ
雑賀 慶二

1934年和歌山県生まれ、91歳。1961年コメの中から石粒を取り除く石抜き選穀機の開発を機に(株)東洋精米機製作所を設立。精米機器およびコメやその加工に関する研究や技術発明に従事。「医食同源」の社会実装を目指し、(公財)医食同源生薬研究財団を設立。「国民の健康を米に託す」をモットーに、現在も東洋ライス(株)代表取締役、東京農業大学客員教授、(一社)日本SDGs協会名誉会長として活躍中。

手間に隠された無形の価値

私は、創業から約60年、米の石抜き選穀、精米などの技術開発に取り組んできました。米は、白く見せるために削れば削るほど、本来の力までなくなるんです。私は、15年かけて、やっと糠を薄く残す方法に行き着いたんですけども、やっぱり糠は人の体に良かった。それ以来、削らず生かすという考えを大事にしています。

西村 瓶で米を搗く、これは、大変な作業ですね。

雑賀 足で搗くのもあったけど、これは、子どもの仕事だったんです。今は、家族に言われて山芋をすりますよ、でもそれよりもっとしんどいことでした。

西村 それほど手間がかかったんですね。

そういう意味では、機械化やデジタル化は、私たちにとって、驚くほど時間的な余裕を生んでくれていますね。ただ、手取り早く形にすることで、目に見えない過程で感じられていた暮らしの手ざわり感が損なわれてしまっているような気がします。

雑賀 私は、労働というか、家の仕事で体が鍛えられてましたよ。瓶搗きは、続けていけば、糠の粉が出てきて、そこから粉どうしがくっついて剥がれやすくなり割と早く作業が進みますよ。ガムがガムで剥がれるのと同じ原理ですわ。私が開発した無洗米加工技術は、そこから発想したんです。やっぱりね、昔の生活から我々が学ぶべきことは多いですね。

西村 子どもの頃、家の近くの池でよく

遊んでいました。危ないこともあったけど、そうした経験の中で、体の使い方や遊びを工夫する力が自然と身についていたように思います。

雑賀 いつも思うのは、有形の物にも価値があるけど、無形の物にこそ価値があるんやということ。海外で量産した米と国内で生産した米とを比べると、同じ米やけども、日本の米には、無形の価値があるんですね。

西村 確かに、お米には、お金には換えられない価値がありますよね。

雑賀 そもそも、水田は単に米をつくるだけでなく、いろんな役目をしているんですよ。例えば、大雨の時には、水が水路へ一気に流れ込むのを抑えるダムのような働きがあるとか、生態系を維持するとか、環境面でも大きな役割を果たしているんです。

技術もまちづくりにも 終わりが無い

西村 久山町では、米の地産地消を進めることで、体の健康だけでなく、担い手育成や土地の維持につなげていきたいと思っています。町独自のお米券は、久山の米を町民が食べる、その循環のきっかけづくりの一つでした。成果はすぐには見えませんが、暮らしの土台をつくるのは、体験の積み重ねだと思っています。

雑賀 久山町がやろうとしていることは、まさに、無形の価値を教えていくこ

と。これはすごい立派、やっぱり町民さんが立派やね。

西村 子どもたちには、水はどこから流れてきてどこに行っているのか、米はどうやって作られて口に入っているのか、そうした意識を実体験から学んでほしいと思っています。

雑賀 モノを開発しとると、やっぱり壁にぶつかるもんです。うまくいかないことはあたりまえですね。お天気だつていい時ばかりじゃないしって思うて、また色々考えるんです。終わりがいいね、学びはこの年でも進行の過程ですよ。

西村 なるほど。まちづくりも同じですね。良くなったから終わりではない、また次、また次と学びと実践の繰り返しです。

